

日本文理大の学生が撮影した
映画作品の製作統括を務めた



日本文理大(大分市)情報メディア学科の学生が授業で撮影した短編6本をまとめ、「大分ドキュメンタリー∞学生のまなざし」のタイトルで6月に市内の映画館で公開した。県内を舞台に社会問題や戦争の足跡、家族の姿を映した作品で、アンケートでは98%が「見た見たい」と回答。「疑問に思ったことをストレートに取材していくという姿勢が認められたのでは」と分析。「今後も続けていき



人間を丸ごと表現したい

たい」と話す。

小島 こじま
康史さん やすふみ (59)

岐阜県可児市出身。大学卒業後、百貨店に就職したが、今村昌平監督の「楢山節考」を見て映像表現に関心を抱き1年で退職。日本映画学校(現・日本映画大)に入學し、創設者である今村監督の「人間の素晴らしさを丸ごと撮影する」という姿勢に影響を受けた。28歳の時、同性愛者を描いたドキュメンタリー「らせんの素描」で劇場映画の監督としてデビュー。製作に携わる一方、1995年から同校などで教壇に立つ。2016年から日本文理大教授。県内各地で取材や撮影をする実践的な方法で指導する。大分合同新聞ホームページの動画ニュース「地域の芽、学生の目 NBUビデオ通信」の製作にも取り組む。「『観察を重ねて、人間を丸ごと表現する』という恩師の教えを伝えていきたい」と後進の育成に情熱を注ぐ。趣味の囲碁は六段。大分市で家族と暮らす。(大江謙一)